ティアの涙

　ティアは今日もトイレで泣いている。

　ロボットが何故泣くのか？　目に涙があるから、それが溢れれば泣いている状態となる。では何故涙があるのか？　人間そっくりのロボットの目がただのガラスレンズだけでは少々気味が悪いため、潤いが必要であろうというのが一つめの理由。もう一つは、人間の涙による眼球の異物除去のシステムは非常に合理的であるからだ。かくして、ロボット・ティアの生みの親である故・品上英世博士は、彼女たちに涙を与えたのだ。

　その男が離れた。ベッドに座って、ティッシュペーパーで股間をごそごそと拭いている間、ティア・タイプＫ……キヨカは虚ろな眼差しで宙を眺めていた。
　その男は蒲生（がもう）鯨介（げいすけ）、人呼んで「ドクターＧ（ジー）」。先日亡くなったＴＲＳ研究所所長・品上英世博士の後任である。
　ドクターＧは人間嫌いの偏屈者だ。人を殺すための兵器や装置ばかりを研究開発している。研究所職員である雨月武とは一度も口を利いたことがない。ティア・タイプＭ――マリコにも見向きもせずに、専らタイプＫのみを性欲発散の相手としている。時間は大抵決まっている。夜の九時から十二時頃までの間に、「コールサイン」がキヨカに対して送信される。キヨカは蒲生博士の自宅となっている居住スペースの寝室に行き、裸になってベッドに横たわる。蒲生博士は服も脱がずにいきなり男根を挿入する。激しくピストン運動を繰り返して射精すればもうキヨカは用済みである。

　ティアの女性性器には洗浄システムが充実している。事が済むと自動的に洗浄殺菌されるのだ。そして、廃液はトイレに排泄する。
　キヨカはトイレで用を足すついでに泣くことが習慣化していた。別に悲しくて泣くわけではない。ティアの涙にはもう一つの役割がある。それは、言わば「リセット」もしくは「リフレッシュ」の機能だ。負荷がかかっている領域に関わるメモリを解放したり、ハードディスク内の不要ファイル削除や整理といったクリーニングを行うのだ。それにより、システムやプログラムのエラーやバグの発生を軽減することができる。要するに、人間の涙同様、単に眼球のみならずアタマ（電脳）乃至はココロも洗い流すというわけだ。

　トイレから出てきたキヨカに、もう一人のティア――タイプMのマリコが歩み寄った。
「ごめんなさいね、キヨカ。あなたにばかりイヤな思いをさせて」
「これも仕事の一つだわ」
「でもまあ……あんな脂ぎった小汚いオヤジにヤラれても、洗浄システムのおかげでアソコはいつもキレイ……それだけがせめてもの救いね。そう思うしかないわ」
　マリコは内部に井上真理子の魂が宿っている。すなわち、肉体の代わりにロボットのボディを持った人間である。そのおかげで人間嫌いの蒲生博士は彼女に手出ししないのだ。
　人間の言い回しは理解が難しい。辞書的な意味はわかるが、直訳しても全く論理的でない。「脂ぎった」……精力的でどぎつい、しつこいオヤジというのはわかるが、蒲生博士がそれに該当するかどうかは確たる基準がないし、定義も曖昧だ。「小汚い」……確かに蒲生博士はあまり風呂に入らないようだが、生き物である以上、発汗もすれば老廃物も出る。汚いというなら、汚くない生物など存在しない。「せめてもの救い」に至ってはもうお手上げだ。人間臭いニュアンスは前後の脈絡から読み取って判断するより仕方がない。
「武さんは違うのね？」
「ええ。彼はとても優しいし、心からわたしのことを愛してくれているわ。あなたの品上博士と同じよ」
「品上博士……」
　キヨカは呟いた。

　キヨカとマリコは武や蒲生博士の食事の用意もする。今日はキヨカが買い出しに出掛ける当番だ。近所のスーパーマーケットで食材を買い物カゴに入れていく。林檎を手に取った際に横の一個が転げ落ちてしまった。側にいた男が拾って台に戻した。
「すみません」
　声をかけたキヨカは、その男がどことなく品上博士に似ていると認識した。身長、横幅はほぼ同じ。顔立ちも共通項が多い。
「わたし、キヨカです。あなたのお名前は？」
「えっ？」
　男は驚いてキヨカを見つめた。

「わたし、ロボットですけど、いいですか？」
　男――名前は小池博和という――のアパートのベッドに腰を降ろしたキヨカは告白した。
「ロボット……？」
　小池は首を傾げた。その言葉の意味を正確には理解しかねていた。
「君の方こそ俺なんかでいいの？」
「わたしは、優しい男（ひと）が好き……」

　ティアのボディは体の表面に触覚センサーが満遍なく完備されている。そのセンサーは常時オン・オフの切り替えが可能であり、キヨカが蒲生博士の相手をさせられている時には全ての触覚センサーを停止させている。今、小池博和と体を密着させながら、キヨカは体中のセンサーを働かせていた。
「ああ……気持ちいい……」
　言わば『全身性感帯モード』だ。彼女の口から、男心をくすぐるえも言われぬ喘ぎ声が漏れた。

「俺……女性にこんなに優しくされたの、生まれて初めてだ……」
　ベッドの上でキヨカと肩を寄せ合いながら、小池は囁いた。
「ほんとに君はロボットなんだな……全然汗をかいていない……」
「これからもこうして時々会ってくれますか？」
「もちろん……」

「どこへ行ってたの、キヨカ？　通信システムを止めちゃって、ウンともスンとも言わないんだもん」

帰宅したキヨカにマリコは問い詰めた。
「わたし、恋人ができたの」
「うそ！　すごいじゃない、キヨカ！」
マリコは歓声を上げた。
「……でもそうなると、ますますドクターＧの相手はしたくないわね……」
「それは仕事だもの」

今日もキヨカはトイレで泣いている。

（終）